成方の笛　解答

A　語句の意味と読み

(1) いただく。頂戴する。(「受く・もらふ」の謙譲語) ／目上の人から物をもらうときに使う。ここは成方が御堂入道殿から笛をもらう

(2) あれこれ計略をめぐらす。たくらむ。 ／「はかる（計る)」に接頭語「た」が付いた形。俊綱が、笛を手に入れるために考えた悪だくみ

(3) かねてからの望み。本来の願い。 ／「ほんい」ではなく「ほい」と読む。「本意なし」＝不本意だ・残念だ

(4) (驚きや恐れで）顔色が青くなる。顔が青ざめる。 ／「色」は顔色のこと

(5) 別の。ほかの。(ここでは、本物の大丸ではない別の笛) ／ラ変「あり」の未然形＋打消「ず」の連体形「ぬ」で「そうではない（＝ちがう)」。この一語がどんでん返しのかぎ

(6) 愚かなこと。ばかげていて、人に笑われるようなこと。 ／「をこなり」(形容動詞）の形でもよく出る

(7) 勢いこむ。気負い立つ。強気になっていばる。 ／「はやる（逸る)」＝気持ちがせく、から。「ひとりごつ」と同じ「〜ごつ」の形。初めの俊綱の強引なようすをいう

B　文法

(8) 断定の助動詞「なり」の已然形。已然形＋「ば」で順接確定条件となり、「〜なので」と訳す。 ／「すばらしいものなので」。未然形＋「ば」なら仮定（もし〜ならば）になる

(9) 「させ」＝使役の助動詞「さす」の未然形（〜させる）／「む」＝意志の助動詞「む」の終止形（〜しよう)。「(あなたに）笛を手に入れさせよう（＝譲ろう)」という意味になる。 ／下二段動詞「得（う)」の未然形「え」に「さす」が付いている。笛を手に入れるのは俊綱、手に入れさせる（譲る）のは成方

(10) 尊敬（お〜になる）／連体形。尊敬の助動詞「らる」の連体形。 ／尋ねたのは身分の高い俊綱。地の文で、作者が俊綱の動作を敬っている

(11) 「申し」＝謙譲語（「言ふ」の謙譲語）／「候ふ」＝丁寧語（〜ます・〜です)。 ／「候ふ」は動詞の下に付いた補助動詞なので丁寧語。「侍り」と同じはたらき

(12) マ行上一段活用（動詞「見る」）の已然形。上にある係助詞「こそ」の結びになっているから。 ／ぞ・なむ・や・か→連体形、こそ→已然形。命令形「見よ」とまちがえない

(13) 逆接（〜けれども・〜のに)。「(笛を手に入れたいと思う心が深いために）いろいろとたくらんだのだけれども、(笛が砕けた）今となってはどうしようもないので」とつながる。 ／★「こそ〜已然形、」と文が続くときは逆接になることが多い。「けれ」は過去の助動詞「けり」の已然形

C　主語・指す内容・敬意の方向

(14) 作者（この話の書き手）から、御堂入道殿（藤原道長）への敬意。 ／地の文の敬語は作者から。謙譲語は動作を受ける側（ここでは笛をくださった人）を敬う

(15) 俊綱が、使いの者に言わせたうそ。成方が「(笛を）売ろう」と言ったことにされている。 ／直前の「たばかりて、使ひをやりて」と、直後の「そらごとを言ひつけて」が手がかり

(16) 俊綱にうそを言いつけられた使いの者の言葉。「候ふ」は、話し手の使いの者から、聞き手の俊綱への敬意。 ／丁寧語は聞き手を敬う。俊綱に問いただされた使いが、うそを重ねている

(17) 話し手の成方から、暇（許し）を与える俊綱への敬意。 ／会話文の敬語は話し手から。「給はる」は謙譲語なので、与える側（俊綱）を敬う

D　口語訳

(18) ぜひとも買おう。ひたすら買おう。 ／同じ動詞を「〜に〜」と重ねて意味を強める言い方。「む」は意志

(19) (しばらく）お暇をいただいて、この笛を持って参りましょう。 ／「べし」は意志（〜しよう・〜するつもりだ)。「参る」は「行く・来」の謙譲語

(20) この（笛の）せいでこそ、こんなひどい目にあうのだ。薄情な笛だ。 ／「かかる目を見る」＝こんな（ひどい）目にあう。「情けなし」＝思いやりがない

(21) (俊綱は）初めはひどく勢いこんでいたけれど、とうとう（成方に）出し抜かれてしまった。 ／「ゆゆし」＝程度がはなはだしい。「れ」は受身の助動詞「る」の連用形、「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形

成方の笛　解答／現代語訳

E　内容・記述

(22) 笛を売るとは一度も言っていないのに、俊綱のたくらんだうそで「売ると言った」ことにされ、身分の高い俊綱から「言い値で買う」と迫られたから。断ればうそをついたことにされ、承知すれば大切な笛を失うという、追いつめられた立場になった。／③「たばかりて」から⑥「ただ買ひに買はむ」までの俊綱のやり方をまとめる

(23) 人々の前で大丸を砕いたように見せれば、俊綱は笛を手に入れることができなくなり、成方を責めても意味がなくなる。実は砕いたのは別の笛（あらぬ笛）で、本物の大丸を守るための芝居だった。／「情けなき笛なり」と笛のせいにしてみせたのも、本物を砕いたと信じこませるための演技

(24) 俊綱がうそまで使っていろいろたくらんだのは、笛を手に入れたい一心からだった。その笛が砕けてしまった今となっては、成方を罰しても何にもならない（「言ふかひなければ」）ので、罰することもなく（「戒むるに及ばずして」）追い放ったから。／俊綱のねらいは成方をこらしめることではなく、あくまで笛だった

(25) うそまで使って笛を奪おうとし、拷問にかけようとまでしたのに、成方が別の笛を砕いてみせた芝居にだまされて手放し、本物の大丸は成方のもとで無事に吹かれていたから。強引な手を使ったうえに出し抜かれたので、愚か者として笑い話になった。／⑮「始めはゆゆしくはやりごちたりけれど」との落差がおもしろさ。欲にかられたずるいやり方は結局むくわれない、という教訓にもなる

F　文学史（本文全体をふまえて答える）

(26) 鎌倉時代の中ごろ（一二五二年ごろ）に成立した説話集。／編者ははっきりしない（六波羅二臈左衛門入道とする説などがある）

(27) 十か条の教訓のこと。「人に恵みを施すべき事」など十の教訓を立て、それぞれにあてはまる昔や今の説話を集めて並べている。おもに年少者に教訓を与えることをねらいとしている。／この話も、たんなる笑い話ではなく、教訓の例として置かれている

(28) 『宇治拾遺物語』『古今著聞集』『沙石集』『発心集』などから一つ。／平安時代の終わりごろの『今昔物語集』は時代がちがうので注意

【現代語訳（全文）】

成方という笛吹きがいた。御堂入道殿（藤原道長）から大丸という笛をいただいて吹いていた。（その笛が）すばらしいものなので、伏見修理大夫俊綱朝臣がほしがって、「（米）千石で買おう。」と言ったが、（成方が）売らなかったので、（俊綱は）計略をめぐらして、使いの者をやって、「（成方が）売ろうということを言った。」とうそを言うように言いつけて、成方を呼び寄せて、「（お前が）笛を（私に）譲ろうと言ったのは、（私の）かねてからの望みだ。」と喜んで、「値段は（お前の）求めるとおりにしよう。」と言って、「ぜひとも買おう。」と言ったので、成方は顔色を失って、「そのようなことは申しておりません。」と言う。

（俊綱が）この使いの者を呼び寄せてお尋ねになると、（使いが）「確かに（成方はそう）申しました。」と言うので、俊綱はひどく怒って、「人をあざむきだますのは、その罪は軽くないことだ。」と言って、（成方を）雑色所へ下げて、木馬に乗せ（て拷問にかけ）ようとしたとき、成方が言うには、「（しばらく）お暇をいただいて、この笛を持って参りましょう。」と言ったので、（俊綱は）見張りの人を付けて行かせた。

（成方は）帰って来て、腰から笛を抜き出して言うには、「この（笛の）せいでこそ、こんなひどい目にあうのだ。薄情な笛だ。」と言って、軒の下に下りて、石を取って、（笛を）灰のように（こなごなに）打ち砕いてしまった。大夫は、笛を手に入れようと思う心が深かったために、いろいろとたくらんだのだが、（笛が砕けた）今となってはどうしようもないので、（成方を）罰することもなく、追い放ってしまった。

のちに聞いたところ、（成方は）別の笛を大丸だと言って打ち砕いて、本物の大丸は、何事もなく吹き続けていたので、大夫が愚か者ということで終わってしまった。（大夫は）初めはひどく勢いこんでいたけれど、とうとう（成方に）出し抜かれてしまった。

▸ 古文・漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/koten-kyozai-review/　　▸ 解説記事にもどる